



茶葉集



夢窓集(夜)

舟は玄代の思客もやかりふ年久又
穩くありとて此書も舟のまゝふとせむく
舟を流るるのこゝろよやこの江上の庵をたち
いで喜まざるおれこそらよ何の宿をこゝ
志まきこゝ城路のはてへ杖を曳きまわく
はせ成程女折りとぬれそは讀みつやむし
敷多きもの中よ天の川或ハ又一夢の言
以は團のぬきこゝろよまゝ世人の言

新あふ女中もも悔も降る目や卒一き浮
り存の句は枝女お江の博ある善守精
舎く善女を後き更ふ水一折く讀み
いとむくし句とあや去れはこたひお舟の三三
年の忌辰よりあり本浦大人をけしおあきあ
の流れを汲む人々その昔を思ひひく浮き
屋との句をま向とく百韻を巻き尚ほま
向の心もくを集めて善女集と名人あつ
をあのさゆし——は伊豆大人女態に讀ふ

来々已れよなうきをあまてよし讀ふ如し
細きつは暗きゆまゆはくく心あみられとも
なほ陣く讀けく女まき集る群あ
た久しきあ集るをくはもの

明治廿三年七月

あつ日庵のま

あつ

末是聖子のひそ指さす
きね連さうさうさう
掛るえの月の聖家の白く標
時うさうさうさうさう
木織前 里を起しめ 是を流
楽内 ねとよの けり
市ちりき ぶさうさうさう
飼とさふ ねの おめい おとせ

蟻 蘇
月 松
可 凌
梅 窓
吳 井
良 明
大 魚
岫 中

すさうさうさうさうさう
日午の穀を乃行々 戯れ
行ととまうさうさう
たうさう 孫言れ ねよ
目代よさうさうさう
櫻葉平 入るさう 沙魚の 飛出れ
豊の姓子 流の 船を 忍ぶ 標さうり
猿 平 ありあり あり

菊 壽
圃 柳
九 志
子 衛
不 耕
梨 門
中 外
菊 梅

東雲の空より白く流る花あふり
 汝年のとらぬはりゆくまじりか
 先一ゆくふ酒壺を味もい
 順礼宗の 膝も 柔きんし
 ときふりて 流波の 舟なり
 新の 籠 ながすと 多の 燈りの
 ちぬるやと けりま 無念を 道如合
 ちふとらぬの ときく 始 せし
 奥村 燦河 浦 木 梅 三 花 晴

結納の日よりさあめ 舟を 奥村
 志よりよかきる 流の 水 旭扇
 難くも 小 命を さりし 此流の 馨若 芳芸
 市松織の 花を きりし 水 水 外
 帯かきる 是神を 一 寸 袂 袂 埃
 巻物や さる 井戸の 垢 扱 ふき 権
 掃場と ぶく 出さるる 夕月 工 百 汲
 葉柳さう 楓 志の なる 長 流

二才

好孤を唱らしむり作らば
好ふ連舞をいふは道也
かまれば千治中けりたふら
おとすまゝなりと神ありき
余念あり石女女をわたり
片類笑聲をいふは
つらねるは晴るをいふは
お線會式のまゝなり

葉城 田才 瓜堂 相園 竹富 梅窓 和富 里丘

まゝに手は揺れ流るるなり
有るはなごころなり
此篇は法用紙のりなり
石川にまゝなり
目花に抱ひて
富菜もまゝなり
却し蝶屋に交度なり
手帖にまゝなり

花足 文瑛 抱月 春舟 燕石 木友 稻任 柳里

けいごん 雲より 白の 雲の 艶
 雲 赤ん ころり と 光る 麒麟 系
 賣人 かし むく 色 巻る 友 友 登
 神織 の 伝 伝 伝 ちつ と 伝 伝
 突然 と 聖 の ほか の 揮 揮 弱
 時 の 右 鼓 の 数 を うち ます
 さ 浪 の さ 浪 の 運 ぶ 月 の 影
 羽 集 衣 の 裾 の ころ 絡 や ね

芦 角
 甚 壽
 波 提
 提 扇
 竹 友
 喜 良
 芦 丸
 羽 隣

六

権 の 実 を 二 合 半 拵 て 斗り 分
 い ち ち 松 子 子 楊 柳 ち ち
 は 橋 と ち ち ち 八 思 の 名 と ち ち
 提 っ ち ち 人 は の ち ち ち
 何 ち ち ち ち ち ち ち ち ち 徳
 輪 糸 や ち ち ち ち の ち ち ち ち
 い ち ち の 柳 花 子 ち ち ち ち ち
 以 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

菓 町
 露 村
 魚 公
 杉 村
 蒼 海
 ち 弱
 衣 俵
 華

古不讀滿尾

多白の修好の
はく虫喰

又墨小まうふふりや枝蛙

七十八

水

手向も少きと蝶の福しと後

七十三

巨

不とまはまのけめく二五年

浦

橋やまう一と一とけかをり

雅

たきもの種もゆるしはくは

孫むめ

下り下仰くやも代と本立

花朝め

真あるを葉小手向の杜みうり

七十三

管笠

風よまのさくくめさくをの

南路

ををらぬこえぬまうり号と水

七十七

けえ

互きや執やこしりさ語り後

相海

何号とまき神の二百年

末陽

古年をまきし柳や風を流

花江

湖も晴る外月のこもりうり

晴耕

かくたふれまの世のまの物なり
 かをふれまの世のまの物なり
 稀ふまの世のまの物なり
 仰るやまの世のまの物なり
 古地やまの世のまの物なり
 都のまの世のまの物なり
 系極やまの世のまの物なり
 ほくまの世のまの物なり

如竹
 美ちめ
 本末
 更隣
 九峰
 洗玉
 長園
 梅垣

かくたふれまの世のまの物なり
 かをふれまの世のまの物なり
 稀ふまの世のまの物なり
 仰るやまの世のまの物なり
 古地やまの世のまの物なり
 都のまの世のまの物なり
 系極やまの世のまの物なり
 ほくまの世のまの物なり

巖邸
 榮亦
 芹白
 鶺鴒
 告海
 冬外
 冬石

何、碑の夏より一や 杖の何と
宗陽もや 面影あふふ 庭の白
作け人 むくー くららの 暮の月
あふきし むくを 今よ 暮のま
それありよ 暮あふ 暮集ふを 暮向ふ
以て今 暮集ふ 暮集ふを 暮向ふ
古及の 暮集ふ 暮集ふを 暮向ふ
さき 暮集ふ 暮集ふを 暮向ふ

七十一
蓮 宇
木 深
十 湖
連 水
宗 古
楓 左
明 高

あふきし 暮あふ 暮集ふを 暮向ふ
以て今 暮集ふ 暮集ふを 暮向ふ
古及の 暮集ふ 暮集ふを 暮向ふ
さき 暮集ふ 暮集ふを 暮向ふ
卯のあや かなる 暮のあや 二不季
葉塚の 暮集ふ 暮集ふを 暮向ふ
さき 暮集ふ 暮集ふを 暮向ふ
卯のあや かなる 暮のあや 二不季
月花の 友の 暮集ふ 暮集ふを 暮向ふ

遠 壺
暮 鶴
唯 風
月 鈴
孤 邨
松 圃
随 交
暮 蝶

ちり柳水を鳴り流きたり

有后

三日とあそびつる子も向は

表坂

老てなふしや志く水の望み思

七十也
夏部

波もふいふ世をきり池に水

南珠改
北巖

志く水つるむしを思ふ會式外

うぶ改
桂之

手折るやりの手向も残る葉

小部

いふ世にも増え秋しる志く水ふ

牟水

おもろく除やしる水の會式の秋

冨水

生れひて遠なる堀や時節の日

西湖

手向も山葉花折る菊の日

都山

菊もや志く水を流し尾に松

一夢

そのまゝの志くみかすやつるか

子流ぬ

手向もやりのしる水の

牟梅

あつるしる龍も手向も菊の日

一柳

ぬきて木時節の神も向う年

末文

隙ももしる水をきり手向う部

其玉

高き山に時雨の空や道此日

隼山

しきりや只南無と十二日

信

夜疎

多き中志く水の百七子白柳

北新

時雨會中月か静か多き水

夜月

とる草も静くお月をのぞく日

夜雪

旅子居るをくぬき中時雨空

其東京

夜裁

池の水汲んで多向人十二日

夜蒼

しきりや信を多向人葉一枝

夜在

自五

七十一

古池や多き花の葉のしきり

夜石

松風を多きくしきり

夜冷

口きく清水のくしきり

夜汲

神風はかき中静か多き水

夜雄

多向をく候を多き水

夜城

曙の匂のしきり花の先

夜流

涼き多き静か多き水

夜噴

十一

海の隅の隅に 早月去
 暮草や 可きりき 世に 惜み
 又よきハ 保つ 心 小牡丹
 月影 あり 枝に けしき
 来り たり 不 親き 又 時鳥
 翁 志や 剛の 左 右に 扶と 笠
 一際ハ あり あり 降 けしき
 世の中 あり あり 早 けしき
 可 静
 清 凡
 仙 児
 菖 虫
 瓢 酒
 冬 求
 晚 穂
 雪 外

ちりて さら 暮の 喜 けしき 花
 何となく 袖 あり あり 早月 雨
 石よ さら けしき 暮の 志
 手向を や 卯の 志 けしき
 思ひ 暮る けしき 卯の 花 けしき
 月影の 悲や 八十 有 餘年
 二不 逢 けしき あり あり 田 植 けしき
 碑の 前や 暮 あり あり けしき
 可 静
 清 凡
 仙 児
 菖 虫
 瓢 酒
 冬 求
 晚 穂
 雪 外
 孝 女
 本 友
 小 里
 快 外
 冬 耕
 瓜 堂
 夏 得
 良 明

八十
 七十六

樂むくーるるもむを 富貴妙
 作くまの 埒尾流の中 権の本
 あふりまや 明きき 宮の けしき
 夏の新切や 手向の 石く ちす
 夏くけや 権の 常と 孫のく人
 夏も又 石を ぬの 手向の 那
 夏もや 枯野の 時け 杖の 流
 けしき けしき 明や 手向の 月く 是
 相 富 流 田 聖 梅 竹 相
 扇 芸 芳 才 物 忌 高 圃

十五
十六

権のりや 志とくーや 若の 花
 徳も 権作くまの 高本立
 夏衣しき 額美戸 神の 是
 作くま 指を 言ー 端の 花
 ーくまの けしき 若き 若の 而 常
 頼家や、 菊の かしき 平 不 扇
 魚 云 桂 山 嵐 松 柳 埃 翠 翁 水 外 晴 聖

卯の世のふしをまをす手向の
 何ふかゝる来り顔実如枝陸
 海も世をくくぬぬきくくぬぬの日
 免よりあふ二石手忘や車不台
 常る日や一石伊の意一石
 分りくくくぬぬの海や 苦の世
 昔さふ仰りぬきか 夜の月
 漆 二 花 九 大 二 漆 湖
 湖 景 第 志 魚 凌 月

手向の世のふしをまをす手向の
 碑の向くくくかゝるわくや石合の世
 前ぬる子切てさく人りりり花
 世の横一古根玉きく道燕の家
 細たや去さふく年好の世
 海舟の庵の世をまをす時
 権の世の来り顔や及葉
 若く海舟の陰なるくくく海舟の世
 漆 二 花 九 大 二 漆 湖
 湖 景 第 志 魚 凌 月

石子多す柿の熟りや苔の上
清きやわづらひをさすの松の言
為る石と木の清き清き流
筆取まひ時自直るく夕の那
稚の樹の世より言まはれり
分入せハ及の明き一花の本
石の白き公衆の舌く一花の丸
掛の玉く一恋く一夢や子規

松村 晴河 古樹 岫雲 梅線 甫雪 梅玉如 梅處

清き水のおと廣くうき友の海
梅檀の花のいそりや公衆の
流きやあきく枝の下流の
は海へむす一紙をたふ涙の
系極く一夢の軒のあきく
おもろけのいそり玉まき萱草

月松 六九 溪弄 素耕 行丸 本甫

文音

松多き源平のひと木の新之助

平家

松多

隣りて水は流るすも改まらざる

水

ふれ多や世の一年も度りし

度

嘗やそむけり多能くさのちる

能

卯の春の垣根ついで千風を貫て

千

玉ののちの味知れ秋の

東京

味

和風をよみよとて下り移あくる

下

和

十八

春の多き屋敷の中や船上り

大坂

船

三月のや日と新しうのちから

新

ふれ本河の梅や春いふと志

志

地よ春よと白とけり梅の影

ナコヤ

影

人よりや子供の中は我のしる

我

嘗やたけの二根所多枝の里

枝

あつらぬと春よ指しに雪蒼川

雪

鶴の樹入を中一は白雨

雨

初よりち子 歳て 枯ら びる 松
 加り 今守 新し 幸し 木 松
 月 明く 月 光り あり 光り 竹
 暁 光り 光り 光り 光り 松
 明 光り 光り 光り 光り 古
 古 柳 子 結 ち 中 下 香 月 桂
 打 鼓 音 光り 光り 光り 光り 三
 陰 光り 光り 光り 光り 光り 急
 急 壽

軒の 松 葉 風 吹 け け け け け 可
 映り 如 水 音 光り 光り 光り 一
 芒 光り 世 柄 光り 光り 光り 百
 時 光り 光り 光り 光り 光り 一
 流 光り 光り 光り 光り 光り 一
 春 光り 光り 光り 光り 光り 三
 月 光り 光り 光り 光り 光り 友
 真 光り 光り 光り 光り 光り 友
 里

日よむくやのりきよの 明きききし

上毛

省 秋

すす掃のきやいそぬま一調子

針 山

結並やし蝶り成るハ成るなる

雪 老

舟了若うける 根さつる 亥の月

新 富

蕪入甲映る 癖よ根とふりす

凌 冬

扇あら手先つめさき 遠路の形

春 市

折流のき紙 如ききり かきんぞ

傳 秋

梅控了 斗下 交せたり 京便り

此 粟

夕よ水よまらく なるしーしこれなる

上毛

琴 堂

青空も 了りり 傳書り 物き花

乙 瓢

秋りーし 何して 衣水衣 切以結し

栗 因

去る 遊覧の 圃けりりり や秋の地

下毛

茂 精

舟りり 船のきききや 若 泉 山

上毛

酒 山

秋庭を 通る 路りりり 若 葉 指

良 太

初手玉 集りり 人を忘る 如 新 名りり

カヒ

木 良

雪家りり 又 日の 懐きし 五月の 那

下毛

吉 齡

夕月の包よ華なり 秋の空 乙年の

阿る方、知らけく 奥 大板り形 知友

描よりハ洗くよ 空を 美 葉 孤 柳 翠

新説のたより 秋 旅 中 心 たり 賞 素

訪 舟 中 聖を たのみの 葉の 表 吐 山

一 日 也 夢 あり 了 秋 心 たり 窓 味

生 雲 在 断 ち 見 せ 舟 中 福 心 江 心

秋 楓 の 水 玉 なる 舟 中 都 鳥 南 山

二
十一

自玉

大木より 風の 通ふ 舟 中 秋 植 月

朝 日 中 秋 心 たり 舟 中 美 葉 孤 秋 耳

柳 心 たり 風 心 たり 舟 中 文 珠

人 心 たり 舟 中 美 葉 孤 舟 孤 舟

と 舟 中 秋 心 たり 舟 中 和 高

我 心 たり 舟 中 秋 心 たり 舟 中 里 丘

阿 易 心 たり 舟 中 秋 心 たり 舟 中 友 村

破りおく 休息 中 花の 庭
人よ 流し 膝 中 花の 庭
妻の 水 濁り ぬれ ぬれ
船の 水 濁り ぬれ ぬれ
風 軽く 吹く 花の 庭
一月 中 何れ 陣 陣
村 中 何れ 陣 陣
美の 庭 中 何れ 陣 陣

貞 彦
碩 宇
高 孝
清 如
和 弱
真 村
真 邸
克 明

花の 庭 中 何れ 陣 陣
柳の 庭 中 何れ 陣 陣
稲の 庭 中 何れ 陣 陣
系 帯 の 庭 中 何れ 陣 陣
世の 庭 中 何れ 陣 陣
柳の 庭 中 何れ 陣 陣
舟の 庭 中 何れ 陣 陣
影の 庭 中 何れ 陣 陣

斗 月
酒 々
号 雲
木 盡
理 咄
仕 雲
柳 水
琴 磨

浪おとをひき 本谷の層梅うね
 月涼し打出の漢をねとまのら
 まよ〜〜色よ海よ 男〜
 かえりや今昔かゝる 水より
 照り込めあふ中 西風の中
 子よん おくろき 揚おろし
 教 山 眞 道 春 塘 月

宗奥

縁洗ふ石と水あり かしは〜
 梅すれよ 薫る 節 風
 ちりし今昔の多岐の封切〜
 あり合物料理るよあふ
 夢如く古月を大きく 澄みゆり
 晴〜〜水ぬ 虫の 花 文
 梅 松 木 南 梅 玉 松

子の戸も今を住まき 井の春
 堂の供ひなるも 弱 米
 羅帳の初うも 流りを時の運
 縁の日記よ ちるに 梅の 春
 ふたううんこ 弄う 縁子 たり
 初ま公と ころぬ 後 丁 子
 夢通くさー 正月の 朝 空く
 勢 此れ うき 縁の 地 情 さ 烈く

玉 甫 華 松 意 玉 甫 華

ちんをなく 都の人の 業を 軽き
 今ひしー 何と 不 登 する 琴
 花の ちか かりを 競ふ 夕を えふ
 ちやうら 山も 打 伝 まふ 相
 出歩り 子人 丸 繋り 路も ちー
 久し ありし ころ 酒を 出さ ちー
 ちふん ちよ 其 向ふ ち ち 庭 乃 石
 覚 自 在 ち 引 ち 出 地 ち ち

華 松 意 玉 甫 華 松 意

りくふく老當の 列のそく
借く扇は 扇を かな文字
妹を 親の 柳の ときく 守り
風を 扇の とき 袴を 酒し
川流の 後を ゆくは お刺刀
けりて 涼し 蓮の 実の 花
きり 形を 月の 景色も 盆の うち
まら 玉 踊り 柳子 おり ぎ

画 玉 南 舞 松 画 玉 南

ふとくふハ 二数 匠なるも 福とし
好く 書畫ハ 目利するも 好
懐寢の せよ ありハ 詠の 徒
鹿か くれハ 並ふ 踊り 玉
花 采玉 持て ありし 柳子の 春
春も 年の くら ゆく 柳の

松 画 玉 南 舞 松

祖為二不を忘本自意の正新陽公同業あり
お管けよ甲方の徳大あり子前多かりき
ら修せんも切さるるお花を今より梓ふ
もの一を更次 梅よりそ

お花の初き

七年巳野

獲迄 かしきとありりお花よ 本 菊
さうきやまきお花のすく

菊の評

ア

